だれかの沈黙を生きる

久野 量一

「沈黙」という言葉はあまり好きでないような気がした。「沈黙する」、「沈黙させられる」。本当は話したい欲望があるのに、黙ることを強いられている、そういうニュアンスがある。スペイン語では silencio。これを一言いうだけで、「静かにしなさい」という意味になる。うるさい人に向かっていう言葉だ。そんな言葉を強くいわれたとしたら、黙り続けるしかない。だが人は黙り続けたら、黙り続けさせられたらどうなるのだろう。

キューバから米国まで船で亡命してきた人たちを取材したドキュメンタリーを見たことがある（注1）。マイアミに着いて船から降りたばかりの人もいたし、亡命してから少し時間が経過してからの人もいたが、強い印象を残したのは、どの人も雄弁にキューバでの自分たちの経験を語っていることだった。うるさいくらいに声をはりあげる。話がとまらない。いかにキューバがひどいところであるのか、亡命という選択をどのように決断したのか。この饒舌さを前にすると、キューバで強いられていたであろう沈黙に思いがいたる。言えないことばかりだったのではないだろうか。その反動で、あれほどおおっぴらに、何から何まで話しているのかもしれない。

作家のレイナルド・アレナスはそのように命からがら亡命したキューバ人の一人だが、彼が亡命後に受けたインタビューの語り口にも、眼差しにも、とにかく聞いてもらいたいのだと訴えるような深刻さがあふれていた。その後、彼は自殺してしまう。彼は言いたいことを言い終えたのだろうか。

アントニオ・ホセ・ポンテというキューバ詩人の詩を引用しよう。

ある地区の電気が消える、別の地区にともすために。

ぼくの人生はすでに借り物でできている。
光のあるとき、ぼくは見知らぬだれかの生活を叶えている。
暗がりでぼくは言う。ぼくのできない生活を、だれかほかの人が生きている（注2）。

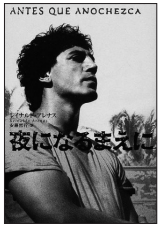
キューバの計画停電をうたった詩だ。一つの地区で停電が起きると、別の地区に電気がともる。欲望を中断するように訪れる暗闇とは、黙らせられることだ。しかしこの詩では、その沈黙はだれか別の人の声を聞くための、あるいは他人の声を想像するための空白としてとらえ直されている。自分のできないことは、だれか別の人がやってくれる。自分の生もまた、声を出せない人の生である。

どこかに、ともにいる人の存在を感じること。自分の沈黙は他人の声にとってかわること。アレナスは自ら沈黙を選んだ。自分のかわりにだれかが声を出すことを知っていた。

（注1）Almendros, Néstor and Jiménez Leal, Orlando, *Improper conduct*, 1984.

（注2）アントニオ・ホセ・ポンテは一九六四年、キューバに生まれ、二〇〇七年からマドリードに住んでいる。この詩はキューバにいるときに書かれたもので、原題は "Vidas paralelas (La Habana, 1993)"。日本語にすれば、「並行する人生（ハバナ、一九九三年）」。タイトルはプルタークの『対比列伝』（邦訳では『英雄伝』など）からとられている。

くの・りょういち　総合国際学研究院准教授　ラテンアメリカ文学

文献案内

ネストール・アルメンドロス『キャメラを持った男』武田潔訳、筑摩書房、一九九〇年
レイナルド・アレナス『夜になるまえに』安藤哲行訳、国書刊行会、二〇〇一年
Ponte, Antonio José, *Asiento en las ruinas*, Renacimiento, España, 2005.